

■ 書 評



精神薬理学エッセンシャルズ 第3版 神経科学的基礎と 応用

Stephen M. Stahl 著
仙波純一, 松浦雅人, 中山
和彦, 宮田久嗣 監訳
メディカル・サイエンス・
インターナショナル
2010年5月
912頁, 定価 14,700円

本書は既に確かな評価を得ている Stahl による精神薬理学のテキストの改訂第3版であるが、序文の終わりの文章に「読者が、この魅惑的な精神薬理学領域の第一歩を踏み出して旅立つことを切に望むものである」とある。精神科臨床における薬物療法の進歩は目覚ましくまさに刺激的な状況にあるが、精神薬理学のスタンダードナンバーともいえる本書が版を重ねる度に約2倍の情報量や図版を含む変貌を遂げていることはその進歩を象徴的に示しているように思える。本書を読むことそのものが Stahl のいう精神薬理学という世界への旅となっている印象である。

本書は本文のみで836頁、その中で(純粋な)精神薬理学以外の記述に過半以上を割いている。先進的な内容を含む今日的な多くのトピックスを盛り込みつつ、難解な概念を読者に理解しやすく工夫が凝らされた内容となっている。日本語版全体で761点の図版が盛り込まれており、表と合わせると各頁に一つ以上の図表があるという構成になっており、図表による視覚的な情報が本文による解説とで相互に補完されている。視覚的理解のための工夫としては症状に対応した表情描写や複数の配色が旧版からの特徴であるが、新版では神経活動について過活動：赤橙色、正常：紫、ベースライン：灰色、活動低下：青というスケールで配色の統一を行って、脳機能の変化を示している。

中を見ていくと神経細胞とシナプス形成について

基本的な構造と機能から丁寧に神経伝達機構を説明しているが、シグナル伝達については6次メッセンジャーまで記述した上で遺伝子発現を説明するなど流れを意識した解説になっている。またリスク遺伝子について細胞レベルから薬理機序への関与、脳内神経回路への影響など最近の分子生物学的な知見も随所に盛り込みつつ、精神疾患の症状形成に至る過程までの解説に繋がっていく。その他の特徴点として従来の薬理学の本では余り記載されなかった脳機能検査や精神症状の評価などの解説が盛り込まれていることがある。例えば脳機能画像の解説の中でn-バックテスト、ストループ課題を図説しており、不安障害でのCOMT 遺伝子の中間表現型の関与やナルコレプシーにおけるDLPFC(背外側前頭前皮質)活動低下を示す図の中で認知課題としてn-バックテストの図を加えるなど、わかりやすいプレゼンテーションとなっていることが目を引いた。その他、精神機能の評価尺度(PANSS, BPRSなど)において統合失調症の陰性症状の評価を取り上げ、症状項目の各々をイラストで示していることやうつ病のDSM-IVの診断基準に沿った各症状を神経回路の図を併記しつつ視覚的に理解できるように工夫している。また前版においても詳しい解説がなされていたが、受容体やイオンチャンネルの構造と薬理学的機序などの機能や精神症状と脳内神経回路についての図説が更に充実しており、精神症状や向精神薬の薬理機序(作用と副作用)と神経回路ネットワークについて網羅的でありながら丁寧な解説がなされている。

このように実際の臨床場面において有用で実用的な内容が随所に盛り込まれているが、イラスト表現とするために Stahl の視点から単純化している側面もある。そこで本書を精神薬理の概要を理解するための出発点のテキストと位置付けつつ、システマティックレビューや薬物療法のガイドラインを参考に治療戦略を立てるといった読者側の工夫が加わることによって、その有益性がより高まると思われる。

(谷井久志)